風祝永夜抄

ジリジリと体を焼くような暑さが続く夏真っ盛りの幻想郷。
そんな暑さを紛らす為、人も妖怪もアレコレ工夫しながら過ごしていた。昼間からキンキンに冷えたビールを飲み暑さを忘れて陽気に騒ぐ者、夜な夜な墓場で霊の類を捕獲して涼しむ者、氷精が住んでいる湖に遊びに行って避暑地代わりにする者と様々である。
しかし、そんな暑さとは無縁の場所が密かに存在していた。
人間の里から南西へ行った所に迷いの竹林という場所がある。その広さは概ね人里の二倍近い面積を誇っていた。
普通の人間でも散歩感覚で行ける距離ではあるのだが、それは入り口までの話である。中に入れば異様なまでに成長した無数の竹と、緩やかな斜面があちこちにあり、同じような景色が延々と広がっている。
真っ直ぐ歩いてるつもりでも気付いたら全然違う場所に居たり、元の位置に戻ってきたりと、この竹林を知り尽くす者以外が踏み込んだら最後、自力で出るのは不可能であった。
おまけに、ここは妖獣が多く住み着いていた。人里の近くにありながらも危険な地域なので、まず立ち入る事はない。
そんな危険漂う竹林の奥に、ひっそりと大きな屋敷が一つ建っていた。
その屋敷の外観は昔ながらの日本屋敷そのものであった。建築されてから数百年以上は経っていると思われるが、どこにも古びた様子はなく、まるで新築のような造りを保っていた。
屋敷の名前は『永遠亭』という。しかし、その事を知っている者はここの住人しか居なかっ

た。それどころか存在自体知る者は極少数であった。
この永遠亭は、屋敷全体が高く伸びた竹葉によって覆われており、これが日光を遮っていた。それに建物全体を通して風通しも良い構造をしていて、雨が降っても湿気も篭り難い。
それに加えて屋敷の周りは何者も近付かない為、風で揺られる竹葉の音以外、外観と釣り合うように物静かな場所であった。

――そんな平穏な屋敷で、小さな事件が起こっていた。

「ウドンゲー！　どこに居るのー!?」
長い廊下をキョロキョロと見渡しながら『ウドンゲ』と叫んでいる者が居た。
やや青味がかかった明るい銀髪を三つ編みで垂らし、やや奇抜な服装をしていた。永遠亭の住人の一人、八意永琳（やごころえいりん）である。
永琳が何度か同じ様に叫びながら廊下を進んでいると、やがて前方の部屋の襖がサッと開いた。
「あらウドンゲ、こんな所に居たのね――」
と言いながら近付くと、襖からひょっこりと小柄な少女が出てきた。
「あれ、お師匠様？　鈴仙を探してるの？」
部屋から出てきたのはウドンゲではなく、小さい体ながらも妖怪兎の長、因幡（いなば）てゐだった。

「あら、てゐ。あなただったのね。ちょっとウドンゲに薬の材料を取ってきてもらおうと思ったんだけど……」
永琳は部屋の中を見渡してみるが、中に居るのはてゐと妖怪兎が数羽だけであった。
「鈴仙はここにゃ居ないよ。あ――そういえば、さっき廊下ですれ違ったんだけど、真っ青な顔して外に出て行ったのを見たよ。また何かやらかしたのかと思ってた」
「……おかしいわね。特に何かした訳でもないのだけれど……」
二人して「う～ん」と唸りながら首を傾げる。
「何か変な物でも食べたとか、お師匠様の実験中の薬を味見してみたとか？」
てゐは適当に推測してみるが、永琳は首を横に振る。
「それはありえないわ。あの子が私の薬を勝手に使ったりすると思う？」
「思いませーん」
即答であった。てゐは悪戯っぽく笑っている一方、永琳は溜め息を吐く。
「それは冗談として、鈴仙を探してるなら手伝いますよ。この子達が」
てゐは自分の足元に寄り添っている兎をひょいっと持ち上げる。ふわふわな毛玉のような兎はつぶらな瞳で永琳の顔を見つめていた。
「いや、大丈夫よ。外へ出たのなら、いつもの所に居るんじゃないかしら？」
「いつもの……ってことは、やっぱり、なんかやらかしたんだねぇ」
「何をしでかしたかは本人の口から語ってもらうわ。てゐ、ありがとう」

永琳はてゐに礼だけ述べると、さっさと玄関に向かって歩いて行く。てゐと兎達は段々と暗闇に消えて行く永琳の後ろ姿を見ながら、両手の平を摩って「くわばら、くわばら」とおまじないを唱えていた。

永琳が玄関を出ると、迷いもなく屋敷の壁を沿うように歩く。屋敷側はまだ明かりが灯っているが、竹林の方は月明かりが差し込む程度の明かりしか無く、竹葉の密度が濃い場所は闇に包まれていた。

やがて屋敷の向かい側に、満月の光を浴びた蔵がポツンと建っていた。

永琳は進路を蔵の方へと変える。

「……」

永琳が蔵の前までやって来ると、扉に刺し込んである和錠が外れているのが目に付いた。

（これじゃ中に居ますよって言ってるのと同じ事よね）

そんな事を思いながら扉の取っ手をゆっくりと引くと、蝶番からキィーという軋む音が辺りに鳴り響いた。

蔵の中は真っ暗闇に染まり、少々カビ臭い。以前から掃除しようと思ってはいるのだが、中々手をつける機会がなかった。

永琳は渋々中に足を踏み入れると、すぐ脇にあるスイッチを手探りで見つけて押す。すると、天井からぶら下がった電球にぼんやりと光が灯る。

永琳はそこら中に詰んであるガラクタのような物を見渡しながら中へ進む。
（どっかで整理しないといけないわね……）
いくらそう思っても、機会が無ければ延々と片付ける事はないのかもしれない。
突き当たりまで進み、部屋の隅っこに視線を移すとそこにはウドンゲ――もとい、鈴仙・優曇華院（うどんげいん）・イナバが居た。ウドンゲとは永琳が付けた愛称であった。
鈴仙は体育座りをして首をうなだれていた。
永琳が来た事に気付かないのか、はたまた分かっていて無視をしているのか、永琳はウドンゲに近付いて声を掛けた。
「……ウドンゲ」
その声に鈴仙は一瞬体をビクッと反応を示すが、顔を上げる様子はなかった。
（今日はいつにも増して重症ね……）
鈴仙は大きなミスを犯したりすると、この蔵に逃げ込んでは、ほとぼりが冷めるのを待っていたりする。だが、結局はすぐに見つかって永琳からお仕置きを受けてしまう。
しかし、今回はいつもと違っていた。普段は空き箱の中に身を潜めていたりだとか、毛布の中に隠れているだとか、それなりのカモフラージュをしていたのだが、何かに怯えるように縮こまっていた。
「ねぇ、ウドンゲ？　一体どうしたの？」
永琳が鈴仙に近寄って肩に手を当てると、再びビクッと肩が震わせて鈴仙は顔を上げる。

ただでさえ赤い瞳の目はさらに充血して腫れ、ずっと泣いていたのだろうか、顔がくしゃくしゃになっていた。
「ウ、ウドンゲ⁉」
「……うっ、あ……お、お師匠さまぁ……‼」
鈴仙は目頭に大粒の涙が浮かび上げ、困惑した表情の永琳の胸に飛びついた。
「ひぐっ……ど、どうし……！」
鈴仙が必死に何かを伝えようとしているのだが、嗚咽交じりのせいで全く聞き取れない。
永琳はしゃがんで鈴仙を抱きしめる。そして、薄紫色の長い髪を優しく撫でた。
「良いのよ。落ち着いてから話してくれれば」
「は、はぃ……」
過去に前例がない鈴仙の取り乱しっぷりに、永琳はやや不安になりながら鈴仙が落ち着くのを待つ事にした。

やがて鈴仙は落ち着きを取り戻し、永琳から離れてゆっくりと立ち上がった。
「ぐすっ……す、すいませんでした」
鈴仙の顔はさらにくしゃくしゃになってしまい、永琳の肩や胸元は鈴仙の涙とその他諸々でびっしょり濡れてしまっていた。
「全く……で、一体何があったのかしら？　ここまで酷いって事は、あの子の蓬莱の玉の枝

でも折ったのかしら？」
　それを聞いた鈴仙は、首を横にぶるぶると振る。
「ち、違いますよ！　その……実はさっき月の仲間から、月はまた戦場になる。私の力が欲しいから戻ってきてくれって、次の満月に迎えに来る。もし抵抗しても無理矢理にでも連れて行くって……」
　鈴仙が掻い摘んで説明した。鈴仙はてゐと同じ地上の兎ではなく、月の兎である。鈴仙は波長を操る能力を持っており、その耳を月に向ければ、月に居る仲間達と交信する事が出来た。
「……」
　永琳は眉を寄せて沈黙していた。鈴仙がこの蔵に逃げ込んできた理由も分かった。
　元々鈴仙は月に住んでいたのだが、百年程前に月が戦場と化し、恐怖のあまりに地上へ逃げて来た兎で、永琳が最初に話を聞いた時は「そんな馬鹿な」と思っていたが、鈴仙の必死な態度を見ていると嘘を吐いているようにも思えず、兎に角匿う事にしたのだった。
　戦いから逃げてきた鈴仙を、月の民達は再び戦場の地へと戻そうと言うのだ。ここまで恐怖に怯えてしまうのも無理のない話である。
「……兎に角屋敷へ戻るわよ。この事についてはあの子と相談してみるから」
　鈴仙はこくりと頷くと永琳は踵を返した。鈴仙は置いて行かれないように永琳の後ろにぴったりとくっ付いて行く。
　永琳が蔵から出ると、ちょうど頭上には大きな満月が地上を照らしていた。まるで監視さ

れているような気分になる。
（あの夜をまた繰り返す事だけは避けなきゃ……ね）
それは永琳にとっての罪滅ぼしにして大罪、一夜にして数十人という同胞を皆殺しにして、一人の少女と共に夜の闇へと消え去った満月の夜、その出来事は今でも脳裏に焼き付ていた。
永琳は思い出したくない過去を振り払い、屋敷へと歩を進めて行った。
来た道をさっさと戻り玄関に着くと、てゐが兎を抱き抱えながらぽつりと立っていた。
「おかえりお師匠様、鈴仙もその様子じゃこっ酷く叱られたみたいだねぇ」
永琳の後ろで、しょんぼりした顔をしている鈴仙を見ながらてゐは言った。
「ふふっ、鈴仙は何もしてないわ。それよりてゐ、後で大事な話があるから、それまでどっかほっつき歩かないようにね」
「え、はぁ……」
「それとウドンゲ、あなたもてゐと一緒に待ってるように、その間に何があったか説明しといて頂戴ね」
「あ、はい」
永琳は二人にそれだけ告げると、屋敷の中へと戻って行く。
長く静まり返った廊下を進んで行くと、一部屋だけあからさまに豪勢な襖の部屋があった。
永琳は金箔地の襖の前に立つ。
「失礼します」

永琳はしゃがんで襖を開ける。
「あら、畏まってどうしたの？　永琳」
部屋の中には一人の少女が読書をしていた。
この少女こそが永琳と共に姿を消した少女であり、名を蓬莱山輝夜という。

――人々は彼女を『かぐや姫』と呼んでいた。